

# 卒業生からのメッセージ

今回お届けする第11号では、北海道帯広市の「おびひろ ART クリニック」にて胚培養士(英語ではエンブリオロジストというそうです)として活躍する藤井香友子さんからのメッセージをお届けします。森井校長先生より紹介していただきました。



## 《仕事について》

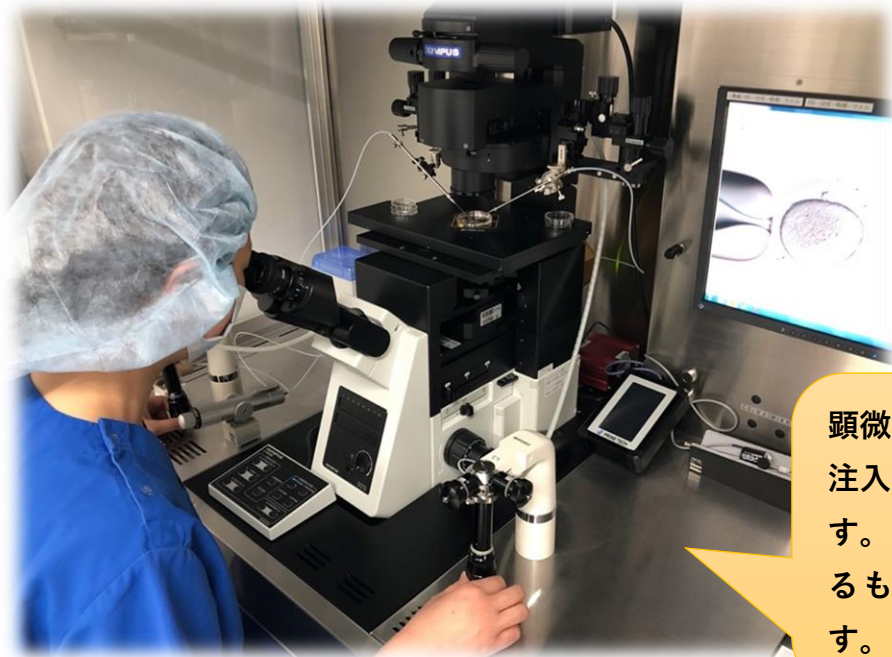
初めて聞く方も多いかと思うのですが、「胚培養士」という仕事をしています(英語ではエンブリオロジストと言います)。その名の通り、胚(=受精卵)を培養する人、です。不妊治療に携わり、子どもを望むご夫婦のために、体外で精子と卵子を受精させてお腹に戻すまでを取り扱う行う仕事です。受精操作だけではなく、必要に応じて卵や精子を凍結したり、融解したり、培養を行っています。

クリーンルームでの仕事になるため、仕事中はマスク、キャップを身に付け、もちろんアクセサリーや化粧も厳禁です。女性にとっては、出退勤は辛い時はありますね。培養室に入る前には手洗いをしっかりして、エアシャワーを浴びて体についている塵や埃を落としてから入ります。



職場の培養室です。体内の細胞を扱うので、様々な手技は、右側のクリーンベンチと呼ばれる特に清潔な装置の中で行います。

操作は主に顕微鏡を見て行います。患者さんの大切な卵や精子を扱うため、(施設によりますが)数年の教育期間をかけて手技を習得しました。自分が初めて卵子を扱う時には手も背中も汗びっしょりでしたし、10年目の今でも緊張しない日はありません。



顕微受精（卵子に針を刺し精子を注入する）を行っているところです。マニピュレーターと呼ばれるものを操作して針を動かします。

## 《胚培養士になった経緯》

高校時代は獣医を目指していました。ご存知の通り、難しい道です。私も浪人して予備校に通っていましたが、結局その夢は叶わず、岩手大学の農学部動物科学過程に進学をしました。畜産に関わる勉強をする学科です。入学時は特に目標もなく、取りあえず大学に通っている状態でした。だからといって大学生活がつまらなかった、というわけではありません。とてとても楽しかったです！知らない土地で文化も違う東北での暮らしは何もかもが新鮮でした。友達や先輩後輩と深いつながりができたり、大学の講義以外でもサークル活動やアルバイトなど、充実した生活だったと思います。農学部ということでジャガイモや枝豆を育てて収穫したり、泊まり込みでの牧場実習もありました。子牛にミルクをあげたり、ウシのツノを除角したり、直腸検査をしたり。全てが初めてで学びになることばかりでした。



大学 2 年の時に胚培養士という仕事があることを知りました。きっかけは大学で行われた講演に参加したことでした。元々高校の時から生物は大好きでしたし、すぐに興味を持ちました。授業や卒業研究としてブタやウシの受精卵を扱ったのもあり、細胞の神秘さ美しさに惹かれて、この分野に進むことに決めました。大学卒業後に愛知のクリニックに就職し、その後は札幌、帯広へと引越し、今に至ります。

## 《高校生の皆さんへ》

将来やりたいことが決まっている人もそうでない人も、まずは自分の興味のないことにも積極的に関わってほしいと思います。自分の視野を広げることとはとても大切です。自分とは違うから関わらない、自分はこの道へ進むから関係ないと思わず、他の人かどんな考えを持っているのか、世の中にはどんな職業があるのか、どんな文化があるのか、とにかくまずは色々なことを知り、挑戦してほしいです。もちろん就職してからでも、何歳からでも新しいことに挑戦はできます。しかし制限が出てくるのも事実です。思い立った時に行動を起こして行ってほしいと思います。

回り道をして、周りの人と比べて遅くなっても、決して無駄なことはありません。成功体験も失敗体験もたくさん経験して、自分の糧として行ってください。



現在の藤井さん